

議事録(議事要旨)

【第1回ふくい県立高校魅力向上プラン策定委員会】

1. 日 時 令和8年4月28日(火)10:00~12:00
2. 場 所 福井県庁6階 大会議室
3. 議 題 (1)福井県の現状と課題
(2)国の高校教育改革の動向について
(3)改革先導拠点について
4. 出席者 油谷泉委員、生島直樹委員、池田岳史委員、石井英真委員、景山直恵委員、
角屋敷文葉委員、北島啓嗣委員、小坂康之委員、笹岡千晶委員、
澁谷政子委員、中森一郎委員、八田幸恵委員、前田征利委員
山内喜代美委員、山下真司委員
5. 議事要旨
 - 福井県教育長のあいさつ、各委員の紹介の後、委員長の互選を行い、澁谷政子委員が委員長に就任した。
 - 委員長から、国の方針に従うだけでなく、教育先進県・福井の強みを生かし、高校生を主役にすることを基本として、福井の学びをより豊かに、教育を通して福井の未来をどうデザインするかを視野に入れたプラン策定をしていきたいとの発言があった。
 - 澁谷委員長からの指名により、中森委員が副委員長に就任した。
 - 事務局が「福井県の現状と課題」の資料に基づき説明を行った。
 - 石井委員が「国の高校教育改革の動向について」の資料に基づき説明を行った。
 - 事務局が「改革先導拠点について」の資料に基づき説明を行った。

【意見交換】

- 委員から、探究学習と教科学習を別物として考えてしまうと、多忙な高校教員も生徒側も疲弊してしまう。探究学習においては、本来、高校の教科書を活用すれば使える内容が多いにもかかわらず、十分に生かされていない。探究学習と教科学習を重ねる(連携する)ことで、探究学習をすることで、教科学習が面白いものとして実感でいる循環をつくる必要がある。両者が別物とされているままだと、試験や受験が終われば忘れてよいものになってしまいよくないため、探究学習と教科学習を重ねていく視点を持って改革を進めていくことが重要であるとの意見があった。

- 委員から、委員会で示す方向性に、現場の教員や生徒一人一人が当事者意識を持てるかどうか、改革の成否を左右する。生徒、教員、保護者、地域の人たちの皆が当事者意識を持ち、主体的に学校づくりに参画していくことが重要で、今後予定されている地域ごとの意見集約の場では、その声を丁寧を受け止めることが必要であるとの意見があった。
- 委員から、働き方改革が進む一方で、教員が学び合うための余白の時間が持てず、教員の仕事は個(孤)業に陥りがちである。目の前の生徒が生き生きと学ぶ姿を見ることが、教員自身が「好き」を育み「得意」を伸ばすことができる環境整備が、教員の意識変化のきっかけになる。教員と生徒が共に学び、対話し、学校同士がつながるネットワーク化を進めていく取組が必要であるとの意見があった。
- 委員から、高校での取組を議論するにあたっては、中学校から高校、高校から大学といった「連続性」を意識した連携を考えていく必要がある。地域の将来を担う人材育成の観点では、大学で行われている取組と高校段階の学びを、分かりやすく「見える形」でつなげることが重要であるとの意見があった。
- 委員から、教員の質の向上に関して、教員自身が楽しみ、知的好奇心を満たすことが生徒の学びにもつながるため、県内大学との学び合いや研究参加など、いわば「県内留学」のような仕組みを作るなどの取組により、教員の好奇心や探究心が満たせるような環境づくりも検討してよいのではないかと意見があった。
- 委員から、福井県教育振興計画は国のグランドデザインと共通点が多いことから、基本的にはこれまでの取組を土台とし、それをさらに強化していく方向で整理していくことが適当ではないかと意見があった。
- 委員から、2040 年問題の議論は、義務教育段階では必ずしも実感をもって受け止められていない現状があり、「選ばれる県立高校」を目指す上では、高校の魅力を発信するだけでなく、中学生や中学校教員を巻き込む仕掛けが必要であるとの意見があった。
- 委員から、不登校経験者が進学することが多い定時制・通信制高校においては、企業実習等の実践的な学びや、学校外での学習の充実といった取組を行っていくことが重要であるとの意見があった。
- 委員から、改革先導拠点に専門的な人材が入る等の仕組みを構築し、改革先導拠点の教員だけに負担が集中しない体制づくりをしていく必要があるとの意見があった。

- 委員から、企業・大学との連携にあたっては、受け入れ側にインセンティブがあることを示しながら、一緒にやろうという体制を作っていくことが大事であるとの意見があった。
- 委員から、探究と教科を切り離して考えるべきではないという点については、福井県教育振興基本計画の策定時にも議論があり、「予測困難な時代を生き抜いていく、多様な分野への探究心、課題の発見・解決力、論理的な思考力を育むため、「教科学習」と「総合的な学習」を結び付け、「探究的な学び」の先進モデル地域として深化を図ります」との方針が文言化されているとの意見があった。
- 委員から、探究学習の推進とあわせて、教科における指導力の向上を支える仕組みが必要であると考えている。そのためには、教育総合研究所等の機能を強化する必要があり、福井大学との連携に加え、県立大学や県外大学との連携を進め、講座の充実を図ることが重要である。教育総合研究所等の機能強化と併せて、内地留学制度などの活用も検討してほしいとの意見があった。
- 委員から、保護者の立場としては、子どもがさまざまな経験や人との出会いを通じて、最終的に幸せになってほしいという思いが大前提であり、2040 年問題に向けて、行政や企業など多くの関係者が子どもたちのために動いていることに、感謝の気持ちを持っているとの意見があった。
- 委員から、県教育長が、これまでは学校側が生徒を引っ張り、保護者が後押しするという関係だったが、今後は学校側と保護者が生徒を支える「両輪」となってより良い方向に導いていくという考え方をしていたことについて、とてもよい考え方であるとの意見があった。
- 委員から、教職員が「好き」や得意を伸ばし、生徒も「好き」や探究心や伸ばしていく姿勢が大切であると同時に、親としても、福井が、ふるさとが「好き」という思いを伝えることが、子どもたちに福井の魅力を知ってもらい、福井のための力になってくれるのではないかととの意見があった。
- 委員から、県外出身者から見て、福井には大きな魅力があると思う。将来、進学や就職で一度県外に出ることがあっても、いずれ福井に戻ってこようと思ってもらえるような教育を親も含めて実施していくことが大事との意見があった。
- 委員から、県の協議会等に参加する中で、福井県の子育てや教育に対する取組は非常に内容が手厚いと感じているとの意見があった。

- 委員から、県庁各課が持っている課題の解決に向けたワークショップを実施している中で、県の取組が高校生には十分伝わっていないのではと感じる。高校生と一緒に、県の施策や課題を題材としたワークショップを行うことで、取組の「手厚さ」を実感できる学びにつながるのではないかと意見があった。
- 委員から、高校を卒業し進学した学生等から「高校時代にもっと関心をもって勉強しておけばよかった」との声を聞く。高校卒業後間もない県内の学生や社会人を対象として、リアルな声を集めるアンケートを実施してはどうかとの意見があった。
- 委員から、改革先導拠点校は、まず拠点の3校から改革を始めるというものであり、今回のプランは県内 24 校すべてを再定義するためのものとして捉え、全ての学校で取り組んでいくものだと考えたほうがよいとの意見があった。
- 委員から、専門高校については、単なる人材供給校ではなく、価値を生み出す人材を育てていくような学びを意識する必要である。また、拠点校と協力校の当事者意識をどのように担保し続けていくかということも大切であるとの意見があった。
- 委員から、「選ばれる高校」という言葉について、解像度を上げていく議論が必要である。人気取りではなく、それぞれの学校がどのような学びの価値を提供できるのかを明確にすることではないか。現場の教員含めて同じ議論ができる表現としたほうがよいのではないかと意見があった。
- 委員から、都市部では私立高校が人気を集めているが、福井県では県立高校に魅力を感じ、進学させたいと考える保護者が多い。私立高校無償化が進む中でも、県立高校の魅力は十分にあり、その魅力をどう際立たせていくかが今後の課題であるとの意見があった。
- 委員から、現場の教員の役割や業務が多すぎる状況で、子どもと向き合う時間が十分に確保できていない現状を懸念している。現場の教員が生き生きと働くことができるように、現場の教員の視点にたって取組を進めていくことで、より魅力のある県立高校となるのではないかと意見があった。
- 委員から、企業としては、成績や学歴よりも、素直さや人を大切にする姿勢、一つのことに一生懸命取り組んだ経験といった人間力を重視しており、そうした力を育てる教育を期待したいとの意見があった。

- 委員から、スポーツでは私立高校が選択肢として強く意識されがちな現状である一方、探究的な学び等に関心を持つ生徒からは、福井県の取組を前向きに受け止めている様子であるとの意見があった。
- 委員から、中学校から高校、大学と連携をして、早い段階から探究学習をはじめ様々な学びに触れていくことは、意義がある取組であるとの意見があった。
- 委員から、働き方改革が進む中で、教員間での業務負担の差がある状況に懸念を持っているとの意見があった。
- 委員から、人材などを「混ぜる」ことを大事にしている。企業にとって最も重要なのは人材であり、日本人に限らず、外国人や女性を含めた多様で優秀な人材が活躍している状況である。福井の若者には、県内にとどまるだけでなく、全国、世界に羽ばたき、いつか福井に戻ってきてくれるというような、広い視野に立った人材育成を考える計画を策定していきたいとの意見があった。
- 委員から、現在企業では中途採用がどんどん増えている現状がある。社会や企業はどんどん変化しているため、そのような視点も頭に入れて考えてほしいとの意見があった。
- 委員から、県職員や教員等の関係者が企業の現場に出て、外の世界を実際に見ることが非常に重要であるとの意見があった。
- 委員から、働くことが単にお金を稼ぐことだけでなく、好きなことを実現するとか、喜び、やりがいと結び付いていない人が多いと感じている。そういう観点からも、「キャリア教育」についてもっと考える機会が必要であるとの意見があった。
- 委員から、何をしたいかがまだ決まっていない段階だからこそ、さまざまなことに挑戦し、経験を積むことができる教育環境が大切であるとの意見があった。
- 委員から、福井の中だけで閉じてしまうと、福井の地域や産業の魅力はわからない。他と比較して初めてその価値が見えてくるものであり、外部からの視点を取り入れて考えていくことが必要。高校改革を通じて、間接的に地域や産業を垢抜けさせていくことが大事だと考えるとの意見があった。
- 委員から、高校選択において、小中での学びを踏まえて「この学びがしたいからこの高校を選ぶ」というように流れを作ることも重要であるとの意見があった。

- 委員から、改革先導拠点校については、通常とは違った取組ができる拠点として、そこでの取組が県全体を活性化するというような展望を持つことが大切であるとの意見があった。
- 委員から、時代の大きな変化への対応とは、何かに追いつくことではなく、未来に向かい続け、問い続ける姿勢が重要であり、知識や技術の陳腐化が進む中では、恐れず変化し続けられる組織づくりや、新たな資質・能力を示した目標設定が重要であるとの意見があった。
- 「教科を学ぶか、教科で学ぶか」という議論を超えて、産業をつくる側の文脈の中で教育を実践していくことが未来に向かうことになるとの意見があった。
- 子どもたちは未来をまっすぐ見て歩いており、自らの「好き」をベースに、教科や事象を結び付けて主体的に未来を創造していくためには、挑戦や失敗が許容される環境が必要であるとの意見があった。
- 福井県は探究学習やふるさと学習の蓄積があり、国内外から一歩リードした実践やノウハウを有しており、本事業を通して、これをさらに生かし、最先端の教育を実施可能であると考えたとの意見があった。

6. その他

- 事務局より、「今後のスケジュールについて」の資料に基づき説明を行った。